慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュティフター文学に於ける人間と自然
Sub Title	Mensch und Natur in Stifters Dichtung
Author	真田, 収一郎(Sanada, Shuichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1974
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.33, (1974. 2) ,p.86- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00330001-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュティフター文学に於ける人間と自然

真田収一郎

周知の如くニーチェは今世紀に入って、その警世的、予言的言説によって脚光を浴びるのであるが、シュティフターも同時代人には、群小作家とみなされ、第一次世界大戦後になって、やっと世人に認められるようになった。その先鞭をつけたのが、ニーチェその人に他ならない。彼は「ゲーテの諸著作と、とりわけ存在する限りの最良のドイツの書物『エッカーマンとの対話』の他に、ドイツ散文小説の中で再三再四読まれるに価する」[1]ものとして、シュティフターの「晩夏」(Nachsommer) を挙げている。炎の人、ニーチェと「静かな法則」をなにより尊んだシュティフター、この対照的両人の中にいかなる精神的血縁関係があるのか不思議に思われよう。思うにニュアンスの違いはあるにしろ、「自然」概念を媒介とした所に、彼等両人の親近関係が成り立つように思われる。シュティフターの生きていた時代、そして少し後に生れたニーチェの時代は、「ホモ・ルーデンス」の中で文化史家ヨハン・ホイジンガがいみじくも言ったように、「ヨーロッパは労働服を着こんだ」時代であった。労働と生産が時代の理想、偶像となり、経済的な諸々の力関係、利害関係が世界史の進路を決定しているとする、恥ずべき誤った考えが提唱され、蒸気機関から電気へという工業的、技術的発展の中にこそ文化の進歩があるのだとする錯覚がいよいよつのっていった時代であった。こうした技術的、経済的因子を過大に評価する時代の風潮は、人間や自然的世界のもっている生々化育の力、美しいもの、高貴なもの、神的なものを殺し、「万物は神々にみちている」[2]世界を、「労働服を着こんだ」人間自身の「日常平俗という型にはめこんで」[3]しまうのである。ここでは自然は単なる物質的生産

の資源、人間によって利用され獲得される物的な富や道具である。ニーチェにあっては、自然は熱狂的、陶酔的な姿をとり、シュティフターにあっては、自然の山川草木の静寂な佇いと、四季の万古不変の推移は、「静かな法則」の象徴としてゲーテ的な静謐明澄な姿を取り、両者共に宗教的感情をもって受けとめられている。ところが彼等の時代は自然を人間の生産活動の予備条件とする「人間のための自然」という状況の中にあったので、彼等が時代に無視されたのも故なきことではなかった。

シュティフターの生きた十九世紀が自然に対する人間の優位を確立し、世界史に於ける主人となったのは、当時の合理主義的、実証的な思想風土、科学技術の異常な発展とそれに伴うヨーロッパ文明の世界史的な膨脹過程の中に考えられるのであるが、その遠因はヨーロッパのキリスト教的精神風土と近世合理主義のキリスト教思想の世俗化にあると考えられる。

聖書宗教では世界と人間は神の無からの創造とされ、なかでも被造物中人間は、「神の似姿」[4]として創造せられ、神的理性を分有するものとして、被造物中、特別の位階を与えられ自然的世界とは次元の異る、より高次の存在と考えられたのであった。しかも神的理性の分有者としての人間の中には、神が自然の外から自然を支配し、秩序づけるように、その神的理性により自然を支配操縦するという期待が生まれてくる。ある意味で、人間中心的なキリスト教の人間学は「神の退位」の始まる近世以降この傾向にますます拍車をかける。支配される自然と支配する人間、こうした人間の自然に対する優位は「神なき近代」にあっては、人が神となり、ギリシア古典の「自然のための人間」が「人間のための自然」となる。近代に於ける自然科学技術の発生は、キリスト教神学の創造説による自然的世界の独立的神的なるコスモスを非神聖化し、非コスモス化することによって、初めて可能なのである。[5]

更にシュティフターの時代は、ともすれば彼の文学の表面上の静けさに眩惑されて、恵まれた静かな時代と誤って想像されがちであるが、ヘッベルの文学や文学史上「若きドイツ」の一派の文学に象徴されるように、「歴史の世紀」の時代にふさわしく、古い時代と新しい時代とがせめぎ合う動乱と激動の時代であった。彼の生存時代、めぼしい戦争革命動乱だけでも、ナポレオンの世界戦争、一八三〇年のフランスの七月革命、一八四八年のフランスの二月革命、およびそれがドイツやウィーンに波及しておこった三月革命という風に、時代の状況は、我々現代と大差なく、貴族と市民、ブルジョアと労働者の階級闘争、民族国家間の闘争に明け暮れたのである。

時代のこうした激動の渦中にあって、「神なき時代」の十九世紀人は、当然十七、十八世紀の近代人と同じく、人間中心主義ではあるが、もはやデカルト的自我や、カントの如き意識一般、先験的自我から出発せず、人間を中心として、人間の作る歴史的世界こそ唯一の現実の世界であると見る。そして自然はこのような人間と歴史的世界とに基盤を提供するだけで、人間と、この歴史的世界の相互関係によって、現実の歴史が構成されるとする歴史主義的世界観によって、この危機をのり切ろうとする。古典ギリシアは自然のコスモスから出発し、それに依拠し、その原理によって、人間存在の原理を見い出していたし、中世人は神への信仰によって、その生の原理を見ていたが、今や、歴史主義的人間中心主義は、歴史と歴史的人間に依拠する。

宇宙の神的コスモスを讃え、古典ギリシアの弟子をもって、自ら任じたニーチェは[6]「生に対する歴史の利害」の中で、十九世紀の歴史的教養を誇る同時代人のことを、「歴史の威力の前に腰をかがめ、低頭する」[7]者たちと嘲笑してはばからず、今や歴史が「宗教的権力」[8]をもつことになったことを指摘した。この近代の歴史的思惟の無制限な伸長と拡大は、それがヘーゲルの世界精神の歴史哲学であれ、マルクスの史的唯物論の歴史哲学であれ、聖書宗教の救済史観、あるいは、「歴史神学」の世俗化であり、ユダヤ的予言思想及びキリスト教的終末論のおそくて遠い産物なのである。[9]

こうした歴史主義的時代的風潮の中にあって、神的コスモスの自然の中に、人間倫理と文学理念を追求したシュティフターの文学が不穏当な誤解や攻撃を同時代人から浴びせられたのも怪しむに足りない。例えばヘッベルや「若きドイツ」一派の文学者仲間から、「草花と甲虫の専門画家」[10]とか、「小さなものをいじりまわしているうちに自然の偉大さを取り逃してしまう」[11]と酷評され、「晩夏」(Nachsommer)にいたっては、「三巻もの大部のものを、文芸評論家としての義務からでなく、最後まで読み通す者にはポーランドの王冠を与える」[12]とまで冷笑される。これが大なり小なり同時代の人々の偽らざる感想なのであり、一八四八年「習作」(Studien)が刊行された時、新聞「現代」(Gegenwart)は「シュティフターが小さなものに示した力を偉大なもの、高貴なものの為に使用してほしい。そして彼がこれまで狭い場所と僅少に限られた時代の人間の運命を観察し描写してきたように、その目を、地上を満たして幾世紀を経てきた人類の歴史の上に向けてほしい」[13]と評し、事件の核心に迫り、事件を明確に把握するシュティフターのような作家には「歴

史の分野に隠された偉大な宝を万人のために発掘する魔法の杖が確かに握られている」[14]と賞賛しながらも、ひたすら彼を歴史に向うことを促す。これがシュティフター文学理解の一般的な新聞論調である。

このような作品理解に対する反論として、彼の文学理念の宣言として、「石さまざま」(Bunte Steine) の「まえがき」がものされた直接の動機なのである。特にヘッベルの文学のことを「偉大な人物も、悲劇的なひらめきも、調和して奉仕する究極なもの、一者がないので人をただ恐怖せしめるだけである」[15]と言い、「悲劇を好んでいるが、彼（ヘッベル）には道徳的深み（道徳人間の尊厳）が欠けているから、悲劇的なもののかわりに、常にいやらしいものを描いている」[16]と酷評する。シュティフターにとってヘッベルは「最もグロテスクで、道徳的に最も虚飾な、最も不自然な詩人」[17]以外のなにものでもなかった。

当代を代表する両作家の相互の文学に対するこの誤解は、両者の文学理念の対照的な相違に起因するわけであり、シュティフター文学が自然の中に静かに生成発展、消滅する諸現象の中に目立たずに持続する現象を取り扱い、自然と人間、全と個の調和を求めるのに対して、ヘーゲルの歴史哲学の影響を受けたヘッベルの文学観は全と個の対立を描き、全たる世界精神は個たる英雄を滅ぼして自己の歩みを貫徹する。しかし世界精神は英雄（世界史的個人）の活動と存在を欠いては、自己実現はできない、歴史は世界精神たる全と英雄的個の悲劇的闘争と抗争を通して、自己発展をすると考えるヘッベルのヘーゲル的歴史至上主義の悲劇論は、必然的に歴史上の英雄や文化的大事件、歴史上の転換期を取り扱わせしめる。それが持続的自然の穏やかな生命の流れる中に文学の本質と普遍妥当にしてかつ永遠なる人間性とを見い出すシュティフターには、ヘッベルの描く悲劇的な「偉大な人物が、人をただ恐怖せしめる」グロテスクなものに見えたのであろう。前者は自然の中に人間の価値の序列を、後者は歴史の中に人間的価値の序列を見ていたと言い得よう。

以上の点から考えて、聖書宗教の救済史観の換骨奪胎、ないしキリスト教歴史神学の合理的世俗化である時代の歴史至上主義的思考が、歴史の時間性のみを尊重し、人間存在のもう一方の基本構造たる空間性としての自然的風土を等閑視し、そのために「シュティフターほどに、人間は先験的範疇の要素の如き空間に生きているのではなくて、人間はすでに行為と思考と共に常に空間的広がりとして実存するという深遠な思想を、目に見えるよう生き生きと透徹して確証していた詩人はいないのではなかろうか」[18]と言われたその人

が、同時代の仲間から冷笑され、それ故に逆に彼以上に反時代的で、「大地に誠実であってくれ」[19]と叫んだニーチェと血縁関係を有していることも首肯され得るのである。

「人間の本質というものが、世界の空間的な形態と存在論的に呼応しており、人間は広々とした田園であろうと、あるいは、その住居が狭い果樹園及至箱庭的な環境にあろうと、この空間に分ちがたく配置されている」[20]というのが、シュティフター文学の特色なのだと言い得よう。言わばシュティフターの空間はカントの如く認識主観の受容的直観形式などではなく、主体的な人間存在の存在論的基本構造としてとらえられているわけで、空間が存在論的に認識せられて、はじめて人間存在の空間性が確証され、主体的人格なる我が、我の外なる同じく人格なる汝と呼応することができ、「間柄」としての人間関係が可能になる。それは単に人格性を有する人間対人間の精神的交合を可能にするばかりでなく、人間対自然的世界との我—汝関係をも成立せしめる。この関係内に於いては、自然的世界は認識主観の対象とならず、シュティフターの場合には、より積極的に、自然は人間にとって叡智的倫理性を有するものとして現れ、人間との内面的結合性を有しているものとなる。もう少し具体的に言えば、我々人間が生きるためには、いずれかの土地（場所＝空間）に住まなければならず、住む場所の気候、気象、地形、土地、風景等の所謂風土は我々の意志に関係なく、我々の日常生活に関連し、その関係は自明的なものとして日常意識にのぼらぬほど、我々が確信し前提としているものであって、我々の食物から生活様式、風俗習慣、好みや趣味や傾向、倫理や道徳、更に美術、宗教、文学、学問等の高度の文化的精神生活の中にも現われていると見てよい。各国民、各民族の気質や気性や文化の特性も自然風土の特性養目なくしては理解され得ない。[21]従ってシュティフターの場合は特にそうであるが、詩人の生れ故郷、南ベーメンの森林地帯、モルダウ河のオーバープランとその周囲の自然を、彼自身の作品の中で倦むことなく詳細に描いている所以も納得のいくことなのである。処女作「コンドル」(Condor)——飛行船からの大地の描写——から晩年の大作「晩夏」にいたるまで、作品の舞台となるものは、家屋敷、庭園、家具調度、彫刻絵画など写真の如く精密克明に描写されているのであって、詩人は岩石の結晶に、花の開花と結実と枯死に、天なる星々の静かな運行に、雲の流れゆく変転に、森や林や田畑における人々の営みとその生活に、自然の弛みない持続的造化力の中に、存在する一切の生を可能ならしめ、特に人間の生活及び文

化をはぐくみ育てる自然の存在論的な意味を汲み取っていたように思われる。

詩人は生れ故郷を次のように描いている。「ふいに目の前に、青い岩壁が南から北へいっぱいに、ひっそりと佗しく連なっているのが見えるだろう。岩壁は夕暮の空に青一色の広い垂直の線を連ね、谷を一つかかえこみ、旅人がクルムアウの町で別れてきたモルダウ川の水が再びその谷にきらめいている。モルダウの流れはここではまだ若々しく源に近い。広々とした肥えた谷には、村々が散らばっていて、村々の間の真中に小さな市場町オーバープランがある」[22]。この肥えた谷は広々とし、ゆるやかな傾斜をなしていて、明るい陽の光が降りそそぎ、谷の背後には点在する森や牧場が平和な佇いを見せている。晴れた日には森の背後にアルプス山系の青い帯が見え、谷の下にハート形のっのたりした蛇行を見せながら、数万年来の歩みをくり返すモルダウの流れは、この単調な広々とした谷の景観に更に一層万古不変の壮大な単調さを加えたことであろう。特に詩人が十二才のとき、不慮の事故により、父を失い、家計を支えるために祖父と共に農作業の手伝をした少年時代の経歴から考えても、故郷の自然への愛は根深いものがある。後年オーバープランを回顧して彼は「私たちは耕し、馬鍬で鋤きならし、牛や家畜類の世話やめんどうをみた。私はあの二年間に田園の自然とその静寂境への限りない愛を感じていたことを思い出す。私はほとんどいつも戸外に居て、なるほど魅惑的でないが、静寂に満ちた、目立たない、叙事詩的な景色に囲まれていた」[23]と述べ、それは「魅惑的ではないが、静寂に満ちた目立たない所であり、しかしそれだけにまた、人間の横暴がまだほとんど及ばない自然のままの地方である」[24]と言っている。この美しく単調なオーバープランの自然は、その陽光も雲も星も月も森も林も山谷や田畑も牧場も動物も、四季の循環に応じて、生命の循環をくり返し、太古以来の不変の姿を詩人に感じせしめたであろう。詩人が故郷を離れるにつれて、「ふるさとは、すでに彼の肉体よりも、むしろ彼の精神の一部となった」[25]と言われるのも故なきことではない。

しかもシュティフターの時代は戦争や革命や動乱に明け暮れていた時代でもあり、なかでも一八四八年の三月革命は、その推移の過程の中で、自由と平等の美名の下に、暴力やテロ行為の常軌を逸した行動が横行するにつれ、革命当初に賛意の気持のあったシュティフターに深刻な打撃を与えるに到った。[26]そして革命の最中、破壊的衝動と空虚な激情のとりこになった人間が引き起す流血と混乱が、

いかに人間の獣性を顕にせしめるかをまのあたりに見た詩人には、「およそ自然的であり自然に依っているものどもは、何ひとつ秩序ではあり得ないものはない。何故なら、自然は全てのものにとって秩序の原因であるから」[27]と言ったギリシア人の如く、生れ故郷の周囲の自然こそ、「可視的世界がコスモスとして体験された」場所[28]となったであろうことは想像に難くない。

シュティフターは彼の処女作「習作」(Studien) 中の「荒野の村」におけるフェリックス少年と同じく、純一無垢に自然に近づき、自然に没入し、自然にひそむ神秘に耳を傾け、自然の中に神を見、神の中に自然を見、自然に依拠して、神の本質と神を認識し、自己の芸術的境域を広め深めて、自己形成をおこなっていった。自然の体現者であるゲーテが、やはり誤謬と暴力、人間的恣意の王国たる歴史的研究によってではなく、鉱物学、解剖学、植物学、色彩論等の忍耐強い積年の自然研究によって、革命や戦争や階級闘争や政治的動乱の時代を乗り切り、時代の風濤に毅然としたその勇姿は、人心の荒廃した時代の精神的状況に如何に対処し、更にヘツベルや「若きドイツ」の文学者仲間からの攻撃[29]に対し、如何に処すべきか苦慮していた詩人にとって、自身が感得していた「静かな法則」と共に、彼の道標となったであろうことは容易に想像できる。彼自身はゲーテではないにしも、ゲーテ的な血縁者のひとりであることを自覚していたのである。[30]

ニーチェは「ゲーテはドイツ的事件ではなく、ヨーロッパ的事件である。自然への復帰によって、ルネサンスの自然性に向かっての向上によって、十八世紀を超克しようとする大規模な試み」であるとか、「私も又『自然への復帰』について語るが、けれどもそれは元々、帰ることではなく高まりゆくことである。――高い自由な、恐るべき自然と自然性、大いなる課題と戯れる、戯れることの許されている、かかる自然と自然性の中へと高まりゆく」[31]ことであると述べているが、ゲーテ、シュティフター、ニーチェが、永遠性を嘲笑する歴史の浮沈から自己を守るため、高貴な人間性を獲得せんがために、自然を媒介項として精神的血縁者となり、更にフランス革命に対して、三者共々否定的見解をとったのも、けだし自然主義的世界観の内包する保守的な精神現象と見られるのである。[32]

それはともかくとして、詩人にとってはいわば晩年の老ゲーテが「自然科学の研究をしなかったら、私は決して人間というものを知ることはなかったろう。その他のすべてのことでは、それほど純粋な直観や思惟に達することはできず、それほど感覚や悟性の誤謬、

性格の強弱などを知ることは出来ない。すべてのものは多かれ少なかれ、屈折しており、揺れ動いており、多かれ少なかれ、人間の意のままになるものだ。しかし自然は、決して冗談というものを理解してくれない。自然は常に真実であり、常にまじめであり、常に厳しいものだ。自然はつねに正しく、もし過失や誤謬があるとすれば、犯人は人間だ」（エッカーマンとの対話、一八二九年二月十三日　山下　肇訳）と言ったのとまさしく同じように、自然は認識や創造の価値概念であるのみならず、人間倫理の規範でもあった。

それというのも詩人が「石さまざま」の「前がき」の中で、人間の世界を「内的自然」と呼び、人間外の自然的世界を「外的自然」と呼んだのも、共に両者は「……的自然」と呼ばれることからして、自然的世界に属し、その秩序に支配されると考えていたからに他ならない。聖なる自然の秩序の前に人間と自然との存在論的区別はない。人間を包み、人間的生命をはぐくむ「外的自然」は次のような「静かな法則」に支配されている。自然に於ける真の偉大なものは「風のそよぎ、水の流れ、穀物の成長、海の波だち、春の大地の芽生え、空の光、星の輝き」[33]であると言い、これに比べれば「雷雨、電光、嵐、火山、地震」[34]等の耳目を引く強大な自然現象は、より小さなものであると言う。火山や雷雨や嵐や地震等の自然現象は、一般的には強大なものとして映じようが、自然研究者の立場からは、日常的にしてかつ持続的な自然の間断ない活動力の特殊かつ突発的な自然力の瞬間的現象であると言う。「風のそよぎ、水の流れ、穀物の成長、春の大地の芽生え」、こういった静かな平凡な自然の活動こそが、自然を支配し、自然を支え、はぐくむ「静かな力」なのであって、それを「静かな法則」と呼び、大いなる生命の母である自然を導く普遍的な力、全自然を貫通する永遠の法則だと言うのである。以上のように、小なる自然現象は、大なる自然現象より価値あるものとみなし、後者は前者の瞬間的な力の顕現にすぎないという詩人の自然観は、「晩夏」の主人公ハインリヒによって、「顕微鏡によってはほとんど見られない空気中の水蒸気から成る非常に小さな水滴が、窓ガラスの上に沈澱して、必要な冷気がそれに加わりますと、繊条や星や扇やヤシの葉や花状の被膜ができます。それを氷結した窓と呼んでおります。氷の放射線や氷の谷や山の頂の結び目は、顕微鏡によって見れば、驚嘆すべきものです。非常に高い山から見下しますと低地に横たわる大地の地形は、まさにこんな風なのです。この地形は無論、硬い素材からできていますし、扇状とヤシの葉の地形を広大な規模に広げております。私が立っている山自体、氷結した窓ガラスの柔らかな織物の真中に見える、白い明

るい非常にキラキラ輝く地点のようなものです。氷結した窓ガラスのヤシの葉の縁は通風による破損によってとか、温気による溶解によって隙間ができたり、とぎれたりするのです。山々の場合には水や空気や温暖冷却等の影響による風化のために、その様な破壊が生じます。ただ窓の氷の尖った頂がこわれるより、はるかに短時間の時を必要とするだけなのです」[35]と、あるいは「貧しい鍋の中の牛乳を沸きたたせて、こぼす力は、火を吐く山にこもる溶岩を押し出して山の斜面に流す力」[36]のようなものだと、たくみな比喩によって語られる。

この自然現象の大小を問わず、自然界、人間界の区別なく、同一の法則（静かな法則）が貫通し支配するという、シュティフターの自然主義的世界観は、初期の作品集「習作」時代にも色濃く出ており、その時代に耽読したヘルダーの「人類歴史哲学考」の自然観の影響を読みとることができる。特に「歴史哲学考」第一章、「いたる所それ自体に於いて足らざることのない自然には微塵にも無限の全体と同等の価値がある。……というのも、あらゆる存在は最大のものにも最小のものにも同一の法則に基いているので、相互に等しいからである」や「世界の秩序を維持し、あらゆる岩石の結晶、すべての虫けら、雪のどのひとひらをも形成する法則は、又人間を形成し維持する」[37]というヘルダーの自然観が、従来から抱いていた詩人の自然観に自信を与えたであろうことは疑いをいれない。

そして地殻の生成について、噴火によって成ったとなす火成説よりは長い歳月をかけて水の作用で形成されたとする水成説を支持し、「自然はその作ろうとするものに、おもむろにしか到達し得ない。自然は飛躍しない」[38]と言い、自然界の生成に植物の成長の如く、漸進的推移と発展を認め、全と個の調和的発展の穏やかな遂行を確信し、植物の蕚も花弁も雄蕊も葉の変形であるように、また「生命というものは小さなネズミにも巨象にも同じように有り、いつも同一なのだ」[39]と言い、「永遠にひとつなるものが、多様に示現するのである。小なるものは大に、大なるものは小に、しかもすべては、その本性に従う」（竹山道雄訳「神と世界中のパララバーゼ」より）と歌ったゲーテはヘルダー以上に、詩人の大小の区別なく作用する「静かな法則」の自然観を養い教導したことであろう。

エッカーマンがゲーテとの対話の中で「最近私は人からひなのはっこう鳥を一羽の親鳥とともにもらいました。……ところで、その親鳥は部屋の中で、ひな鳥にたえず餌をやっているだけでなく、窓から放してやっても、またひな鳥の所へ戻ってくるのです。その様

子を見て、私は感嘆せずにはいられませんでした」と語ると、ゲーテはこう答えたという、「もし神が親鳥、ひな鳥へのこの全き愛の本能をお与えにならなければ、そして同じようなことが、すべての生物をとおして自然全体におよばなければ、この世界は続いていかないだろうよ」と。更に続けてゲーテは、「ミュロンの牝牛の模型」を見て「ここに最もよい例がある。世界を保持し、自然全体を養い育てている原理が美しい比喩となって表われている」（一八三一年五月二十九日）と語っている。同様の主旨の鳥類学的な対話が一八二七年九月二十六日及び十月八日に於いても行われるのだが、シュティフターはこの「世界を保持し、自然全体を養い育てている」ゲーテの自然的原理を人間倫理の領域にまで拡大したのである。(40)

それ故彼は、「静かな法則」は「自然のこの法則が世界を維持するものであるように、人間世界を維持する法則なのである」(41)と確信したのであった。人間界に於いても、この「静かな法則」の人を激情的、熱狂的精神の人よりも重んじた。「正義、単純、克己、分別、己の限られた範囲での倦まぬ活動、美を感ずる心などに満ちた全生涯が、平静で着実な勤勉さと結びついているのを偉大だと思う。激しい心の興奮、恐ろしく喚きたての怒り、復讐欲、行動を求め、押し倒し、変革し、破壊し、熱狂から自分の生命を投げ出す燃えるような精神を、私はより偉大だとは思わず、より小さいと思う」(42)と考えたのであった。それは「嵐や稲妻や雷雨や火山」の活動も永遠の「静かな法則」からみれば瞬間的に消え去りゆく現象に過ぎないのと同じく、人の世にあっても「変革し、破壊し、熱狂する精神」は瞬間的な歴史現象にすぎないし、「公正、質素、克己、己の職分に於ける倦むことのない活動」にくり返される日常の人間の行為にこそ、人間を導く星となる穏やかな法則があるという確信なのであった。それは人類全体の存在を目指して働く力であり、それを「正義の法則」、「徳の法則」と彼は呼んだのであった。この法則は「すべての人間は、他のすべての人間にとって一個の宝石である故、万人が宝石として守られることを欲する」法則なのであった。この法則のみが人間及び人間存在の根底にあって、人類史を貫き、「生命の樹の根を作る百千万の繊維」であり、この人類の「生命の樹の根」こそは、大自然を支え、大自然の生命そのものである「静かな法則」と同じものなのである。何故なら、外なる自然は古典ギリシア及びルネサンスの如く、大宇宙であり、人間の世界は「内的自然」として、前者の大宇宙に呼応する小宇宙として、常に大宇宙の法則と不即不離の関係をもち、それに順応するからである。これがシュ

ティフターの自然観及びそれを踏まえた人間観、世界観である。これを見ても詩人の人倫の思想及び文学理念が、いかに自然に内在する自然の秩序と分かち難く結びついているかが理解できるのである。しかも時代は、歴史の未来と歴史の進歩が信仰され、歴史の実体化、万有の歴史化が行われ、神への信仰の代用物として歴史の宗教が登場していた時であった。そのため自然的なものは人間の実践的活動の予備条件、ないし「精神の自己外化」（ヘーゲル）であったばかりでなく、近代自然科学によって確証された人間本位の「人間的自然」[43]であったり、或いは自然の中に歴史の発展概念を導入したダーウインの力動的自然だったりした時であった。従って詩人が自己の文学理念とし、又人間存在の規範としたものが何であったのかを考えてみる時、詩人の作家精神のなみなみならぬ強靱と矜持を感ぜざるを得ない。ニーチェは「歴史的なものに対する対症薬は非歴史的なものと超歴史的なものである。……（非歴史的なもの）という言葉で私が表現するのは、忘却することができて、制限された地平のうちに閉じこもることのできる技術と力のことであり、（超歴史的なもの）とは生成変化するものから目を転じて、存在に永遠なもの、意味の変わらないという性格を与えるもの、即ち芸術と宗教へと向かわせる力を言う」[44]といっている。まさに詩人は時代の歴史主義病にかからなかったが故に、そしてまた超歴史的であったが故に、永遠なるものへの感覚を失わず、彼の文学作品の中に、できる限りの善や美を結晶せんものと努力したのであろう。シュティフター文学に接して、我々が教えられるところは、詩人の指し示す自然により近く接近することであろうか。健全なもの、完璧なもの、人間の認識や創造の基底、人間の生き方の模範たるべき自然を、今、再び取り戻すことなのであろうか。詩人の作品に接して、静かな安息の気持が得られるのは、彼の芸術の中に、かかる神気を孕んだ自然がいきずいているからに他ならないと思われる。

註（1） F. Nietzsche: Menschliches, Allzumenschliches. Werke in drei Bänden. Hrsg. von K. Schlechta. München 1966. Bd. 1, S. 921-922.

（2） 「初期ギリシア哲学者断片集」山本光雄訳編　岩波書店　十七番　五七頁。

（3） ホイジンガ「ホモ・ルーデンス」高橋英夫訳、中央公論、三二〇頁。

（4） 「創世紀」第一章二七節

(5) K. Jaspers: Nietzsche und das Christentum. München 1952, S. 58-60.
K. Löwith: Mensch und Geschichte, S. 152, 158, 164, 167, 174. Dito: Natur und Humonität des Menschen, S. 179-180. Dito: Welt und Menschenwelt, S. 228-233. In: Gesammelte Abhandlungen. Stuttgart 1960.

(6) Nietzsche: Von Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben. Werke in drei Bänden, Hrsg. von K. Schlechta, München 1966, Bd. 1, S. 252.

(7) a. a. O., S. 263.

(8) a. a. O., S. 263.

(9) K. Löwith: Weltgeschichte und Heilgeschehen. Stuttgart 1967. Vgl. Kap. über Marx und Hegel.

(10)(11) A. Stifters Leben und Werk in Briefen und Dokumenten. Hrsg. von K. G. Fischer, Frankfurt am Main 1962. S. 234-235.

(12) a. a. O., S. 424.

(13)(14) a. a. O., S. 171.

(15) a. a. O., S. 186.

(16) a. a. O., S. 187.

(17) a. a. O., S. 254.

(18) B. Hillebrand: Die Autonomie des Raumes. In: Mensch und Raum im Roman. München 1971, S. 172.

(19) F. Nietzsche: Also sprach Zarathustra. Werke in drei Bänden. München 1966. Bd. 3. S. 280.

(20) B. Hillebrand: Die Autonomie des Raumes. In: Mensch und Raum im Roman. München 1971, S. 173.

(21) 和辻哲郎著「風土」岩波書店。以上の考察は、断片的ではあるが、ゲーテが「エッカーマンとの対話」一八二九年四月二日で述べている。

(22) A. Stifter: Hochwald. in Studien. Sämtliche Werke in fünf Einzelbänden. Hrsg. von F. Pustet, München 1966, S. 184.

(23) A. Stifter: Die Mappe meines Urgroßvaters—Schiderungen—Briefe. Sämtliche Werke in fünf Einzelbänden. München 1966, S. 599.

(24) a. a. O., An Hermann Meyer. Wien 16. 10. 1846. S. 599.

(25) K. Steffen: A. Stifter und der Aufbau seiner Weltanschauung. Horgen-Zürich, Leipzig 1931. Wege zur Dichtung. Bd. 10, S. 73.

(26) A. Stifters Leben und Werk in Briefen und Dokumenten. Hrsg. von K. J. Fischer. Frankfurt 1962. S. 234.

(27) 「自然学」出・岩崎共訳、アリストテレス全集第三巻、岩波書店 二九九頁。

(28) K. Steffen: A. Stifter und der Aufbau seiner Weltanschauung. Horgen-Zürich, Leipzig 1931. Wege zur Dichtung, Bd. 10, S. 66.

(29) A. Stifers Leben und Werk in Briefen und Dokumenten. Hrsg. von K. G. Fischer. Frankfurt 1962. S. 234.

(30) P. Requadt: Stifters Bunte Steine als Zeugnis der Revolution und als zyklisches Kunstwerk. In: A. Stifter. Studien und Interpretation. Hrsg. von L. Stiehm. Heidelberg 1968. S. 151, 153. Stifter an Gustav Heckenast Linz 13. 5. 1854. A. Stifters Leben und Werk in Briefen und Dokumenten. Frankfurt am Main 1962. S. 336-337.

(31) F. Nietzstche: Götzen-Dämmerung. Werke in drei Bänden. Bd. 2, S. 1023, 1024.

(32) ボーヴォワール著「選ばれた人々の生活」岩波現代思想講座別巻。自然主義的世界観の保守性を指摘している。

(33)(34) A. Stifter: Bunte Steine. Vorrede. Sämtliche Werke. von A. Sauer, Gustav Wilhelm u. A. Prag-Reichenberg 1908. (以下 SW). Hrsg. von F. Egerer und R. Raschner. Hildesheim 1972. Bd. 5, S. 4.

(35) A. Stifter: Nachsommer. Bd. 1. SW. Bd. 6. Hrsg. von K. Eben und F. Hüller. Hildeheim 1972. S. 39-40.

(36) (33)(34) の注と同じ。

(37) J. G. Herder: Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. Werke in fünf Bänden. Ausgew. und eingel. von W. Dobbek. Berlin, Weimar 1964.

(38) 「ゲーテ対話録」大野俊一訳、一八〇七年三月十九日 第一巻、白水社、五七一頁。

(39) 同書、一八三〇年七月二日 第三巻、三〇九頁。

(40) P. Requadt: Stifters Bunte Steine als Zeugnis der Revolution und also zyklisches Kunstwerk. Heidelberg 1968. S. 165.

(41) A. Stifter: Bunte Steine. Vorrede. SW. Bd. 5, S. 9.

(42) a. a. O., S. 6.

(43) 理論物理学者ハイゼンベルクは「それ故、自然研究対象というものは、もはや自然自体ではなく、人間の問いに設定された自然であって、その限り人間はここでもまた、自分自身に出会うのである」といっている。Werner Heisenberg: das Naturbild der heutigen Physik. Hamburg 1965. S. 18.

(44) F. Nietzsche: Von Nutzen und Nachteil der Historie. Werke in drei Bänden. Bd. 1, S. 281.